

国際会議
報告

CHI2004 参加報告

京都大学 情報学研究科 中西 英之

中小路先生より「発表体験談も含めて」とご依頼をいただいた。全般的な会議内容は各所で報告されており、また筆者が忘却しているため、blog日記のような個人的内容でご了承ください。フルペーパーの投稿件数は572件、93件が採択で採択率は16%である。筆者の論文の査読結果はギリギリセーフであった。高い評価の要因は新規性であり、低く評価した査読者には新規性を理解させるのに失敗していた。後々になって論旨の筋がちゃんと通っていないことに気付き、発表では多少改善した。ひとえに採択は本年が最終年度となるJSTデジタルシティプロジェクトの御蔭である。石田研究室は昨年10周年を迎えたが、発足当初から「街に出よう」をキーワードとしていた。筆者の論文では、京都駅に取り付けたセンサーに捉えられた人々が仮想京都駅内にキャラクタとして可視化され、画面上のキャラクタをクリックするとその人の携帯電話につながる誘導案内システムを提案している。

タイトルでユビキタス関連と分かるペーパーセッションは筆者が発表したAmbient Intelligenceだけであった。直前にPervasive Computingの国際会議があったからだろうか。暦本氏による基調講演の次の時間帯ということもあり、200人ぐらいは聴講してくれていたと記憶している。時間帯が悪いのかそれとも注目度が低いためか20人以下しかいないペーパーセッションも中にはあった。筆者が興味のあるセッションただだけに残念な現象である。パラレルセッションの数が多いことも一因であろう。全体の参加者は去年より増加し約1800人である。ショートペーパーのセッションに比較的人が集っている気がした。これはセッション当たりの発表数が倍あるため（発表時間が半分）聞きたい発表が含まれる確率が高いということなのか、はたまたロングが退屈ということなのか。発表の合間に別セッションに移るのが大変であった。巨大な三角柱の空間の内部を仕切って部屋にした構造に会場になっており、別の部屋に移動する際はその三角柱の周囲の廊下を延々と歩かされた。芸術性を重視したからなのかそれとも隠れた機能性があるのか。理由は良く分からないが疲れたことは確かである。

いつもどおり空港でスライドの作成を開始し、空の上で大半を作り終え、ホテルで仕上げるといった具合になった。CHI2004のWebで提供されていたテンプレートを使用し、オーソドックスに目的・手法・設計・分析・実装・結論と

いったスライドを用意して本番に臨んだ。各セッションは3件の発表から成り、筆者は3番目であった。初日最初のセッションであるため、前2件の発表から最近のCHIの発表スタイルというものを推し量ろうとしていたところ、予想外の奇抜さに面食らった。最初の発表は、スライドのパラパラアニメーションによるシステム利用シナリオの説明から始まった。次の発表では、システムの使用実験を映したビデオをひたすら流し続けながらそこで起こった出来事の説明がなされた。共通するのは発表方法のベースとして物語を採用しているところである。別のセッションの例では、アート雑誌を思わせるスライドを見せながらフィールドワークの経験を語り続けるものがあった。もちろん大半は従来通り論理をベースとする発表であった。論文発表の方法はあまり変化しないであろうが、口頭発表の方法は今後もいろいろと模索がなされることだろう。

内容が印象的で無かったためか、「全く緊張を表に出さなかったね」とだけ石井裕先生からコメントをもらった発表は無事完了できた。質疑応答は一件だけだったが、終了後にどこかの大学生とオーストリアにある研究所の営業の人から問い合わせを受けた。その研究所では筆者の発表内容に非常に近い研究を開始したとのことであった。国際会議には地元の研究機関にとって、関連分野の研究者に気軽にコンタクトする機会としてのメリットがあることを認識した。地元オーストリア出身の二人の友人Helmut PrendingerとEva Jettmarが会議に参加していたので引き合わせたところ、出身国が同じで研究内容も近いのに互いに面識が無かったのが意外であった。国際会議において国籍は内集団を構成する強力な社会的アイデンティティなので同国人の知り合いを作りやすい。研究内容が近いとそれを話題に話しかけることができる。友人の友人は自己紹介の対象くらいにはなる。さて、それ以外の人々とはどうやって交流すれば良いのか。共通点を持たない者同士のコミュニケーションの支援は重要なテーマであろう。筆者は卒論の研究で出会いのための仮想空間というものを作ったが、やはり集まるだけでは不十分なので交流を取り持つ社会的エージェントを作った。そしてそれを使って博士課程在籍時に、石田研究室とスタンフォード大学Clifford Nass先生のグループとの共同研究の中でKatherine Isbisterらと日米間の交流実験を行った。石田研究室ではまた、多数の研究機関と共同でICMAS96という国際会議を舞台に出会い支援システムの実験を行っている。「CONNECT」がテーマの今年のCHIではまさにそう



撮影：野村早恵子氏

レセプション

いった支援システムが提供されるべきだったと思う。写真はレセプションの風景だが、例えばここにRobovieを置いて何かできたかもしれない。

会議全体に関する筆者の印象としては、研究内容が収束して穴埋め的に先細っていったようには見受けられなかった。数々の興味深い新規アイデアが発表され、IT社会の未来を予感させた。同時に、何かが体系だって積み重なり先に進んでいるようにもあまり見受けられなかった。相も変わらぬ傾向といえるかもしれない。CSCWのチュートリアルを受けたが、HCIと同じような傾向を抱えているように感じた。この問題に関して、Alan Dix先生が特別セッションで興味深い講演を行っている。

<http://www.comp.lancs.ac.uk/computing/users/dixa/papers/chi2004-euro-theory/>からスライドが取得可能なのでぜひご覧いただきたい。最後から2枚目に「定量的分析によって何が起こったのか（現象）をとらえ、定性的分析によって何故そうなったのか（仕組み）を探る」という方法論が書かれている。これは、数年前に石田研究室と当時CRLの井佐原氏のグループとの共同研究の中で高梨氏らと行った社会的エージェントの研究で用いた方法と同じである。Human-Agent Interactionに関する仮説をまず心理実験で検証し、何故そのような結果になったのかを被験者とエージェントとの会話を分析することで探った。補完的関係にある定量的手法と定性的手法を組み合わせることで分析の意義が格段に増したと感じた。しかしながら方法論の問題は分析をどうするかだけではない。「設計 分析」の「分析」をきちんとしたところで、その結果を次の設計に反映する方法が定まらないことには、設計と分析のサイクル「設計 分析 設計 ...」が回らない。筆者がCHI2004で発表した研究では、解決への第一歩として、実験による分析の結果にもとづいてシステム的设计を行った。HCIのこれまでの典型的な貢献の形は設計や分析の中身そのものであったと思われるが、今後は設計内容をどう分析すれば良いのか、

分析結果を設計にどう反映すれば良いのかという方法論が重要な貢献になってくるのではないかと勝手な予想をして参加報告の締めとさせていただく。